

# 東北 VALUE SIGHT 秋田



増田蔵の日実行委員会 委員長  
**加藤 勝義** (かとう・かつよし)

1954年、秋田県横手市増田町生まれ。県立横手工業高等学校卒業。2008年まで市内建設会社に勤務。写真集「増田の蔵」の撮影・編集を担当（05年の発刊以来、07年の第2版、11年の第3版においても担当）。以降「増田の蔵」写真展を各地で開催し、喜多方市をはじめ県内外で講演やシンポジウムも行っている。09年に横手市観光連盟フィルムコミッションを担当。同年、増田地域を活性化させるNPOを組織。元二科会写真部秋田支部所属。現在は蔵の日実行委員会委員長の他、横手市議会議員、NPO増田地域活性化ステーション事務局長を務める。

問合せ  
増田蔵の日実行委員会  
秋田県横手市増田町増田字中町103番地  
増田観光物産センター「蔵の駅」

昨年、秋田県横手市増田町の町並みが国の重要伝統的建造物群保存地区に選定された。増田町では「増田の蔵」を活用したまちづくりを行っているが、元々その蔵の存在は住民からもあまり知られていなかった。地域の宝となる蔵を見つけ出し、より良いまちをつくっていかうというその活動を紹介します。

## 「蔵の町」の地域資源掘り起しは、 コミュニティー活動から始まった

合併前の2002年、増田町には4つの小学校があったが、1校に統合されて3つの校舎が空き校舎となった。その校舎の有効利用を考えるため、行政が各町内会や各団体を招集した。空き校舎の利用方法の検討が目的だったが、空き校舎がない地区の中心部住民も集められた。町からの提案は、中心部はまんが美術館が入っている複合施設の建物を拠点に、地域づくりをしてほしいとのことであった。行政側と中心部住民とで丁々発止のやりとりが始まったのである。住民としては、何故、行政がするべき事を住民に押しつけるのかと反発があった。当時住民には、官民協働や住民主体などという意識はなく、行政依存体質であった。

その後数回集められたが、ハッと思った事があった。集まった中心部住民の顔も名前も私は知らなかったし、彼らも私の事を知らなかった。同じ小さな地域に住んでいながら、互いに顔も名前も分からなかったのである。地域づくりを考える前にまず、ここに集まった人たちだけでも交流や意見交換をしたらどうかと思った。それがまさに、コミュニティーの原典ではないかと感じた。そして増田地域センター運営協議会（以下、地域センター）という、住民主体の任意団体が発足したのである。これが今の増田の重要伝統的建造物群保存地区選定につながった、一つのきっかけである。

## あるもの探しから見つけた蔵や町並み

地域センターでは、どんな活動をするのか話し合いが始まった。しかし何をどうすべきか、基本的

な目標が見つからない。そこで町内の皆さんにアンケートを取り、その意見の中から何かヒントとなる事を見つけようとした。すると、アンケート結果には注目する意見があった。「増田に来たお客さんから、『何処か増田で良いところを紹介して下さい』と言われたが、何も良い所なんて見つからなかった」というのである。センター委員も、確かに何も無い町だという認識であった。その時、誰からともなく「とにかく町を歩いてみよう」との声が上がり、「増田を歩いてみる会」が発足した。これが現在の、「増田観光ガイドの会」の前身になった。

毎日見ている町の風景であったが、改めて見てみると古い商家町の屋並みが続き、当時の暮らしの香りが漂っていた。町を歩く中で「この家の中に蔵があるんだよ」との話があった。その時は意識する事もなかったのだが、その後の会議の中で「蔵を撮影し写真集を出して、後世に残そう」という意見が出た。文化財協会が中心となり、写真集を発刊する事になった。撮影編集は、写真が趣味の私が担当する事となり、構造解説は、地域センター会員の一級建築士が、また歴史背景解説は、地域センター会員で写真集発刊の案を提唱した、文化財協会役員の者がそれぞれ担当する事になった。

スタッフは決定したが、問題は私も含めどんな蔵なのか見つけた事がないことだった。それから一軒ずつ蔵があると思われるお宅に、撮影のお願いに歩いたのである。増田の蔵は家の中にあり、外からは見えない。ましてや先人からの「人様には見せるな」との言い伝えにより、撮影は難航した。撮影許可を得る事が出来たのは数棟であった。その後、私は個別に撮影の趣旨や思いを理解してもらうべく、何回となく通い続けた。1年かけて撮影できたのはやっと

## 「蔵の町」の地域活性とは

23棟であったが、2005年1月に写真集「増田の蔵」が発刊できたのである。

その後一気に、内外に増田の蔵が知られる事となり、所有者の意識も高揚し、所有者による「蔵の会」の発足にも至った。さらには蔵を公開してみようとの機運が高まり、年に1度、蔵や主屋<sup>しゅおく</sup>を公開する、増田「蔵の日」が開催されたのである。この頃から主屋の中にある蔵を、「内蔵（うちぐら）」と呼ぶ事となった。

## 住民主導から行政支援へ

写真集発刊や、「蔵の日」の開催、そして「蔵の会」の発足は行政依存でなく、すべて住民が主体的に活動したものである。これは特筆に値する。その後名声が高まるとともに、行政が支援し始めた。個々のお宅の国登録有形文化財指定や、歴史的まちなみの重要伝統的建造物群保存地区としての選定に向けた事業などが始まったのである。

地域経済の疲弊が続く中、交流人口を増やしうる、増田のまちなみづくりに大きく動いていった。そうして2013年12月、秋田県で2番目、東北で7番目、全国で105番目の、国の重要伝統的建造物群保存地区選定（重伝建）を正式に受けたのである。

## 生きた遺産としての保存活用

あるもの探して町を歩いて感じたあの生活の香りが、実はこの町にとって大事なものである事に疑いはない。町は歴史や文化があって醸成するものである。増田には中世期に短冊形敷地の町割りができ、羽洲街道への2つの脇街道が交差している。さらに

は、日本海に流れ出ずる雄物川の支流である成瀬川、皆瀬川の合流点であり、陸運と水運から物資の流通で栄え、中央からの情報も入ってきた。葉タバコや繭を中心とした農業で賑わい、さらに明治期からは商業活動が発展し、増田水力発電や増田銀行（現在の北都銀行の前身）の成功、そして大正期の吉乃鉦山の活況とも相まって、県南地方の産業、経済の要となった。この文化や歴史をもとに、そこに暮らしてこそ、「まち」として成り立つのである。重伝建地区となった今、まさに生きた遺産として、観光に特化するだけでなく、地域の方たちがここで暮らしていける環境を作る事こそが、町の存続繁栄につながっていくものと思う。

先人が残してくれた有形無形の遺産は、自分の地域に誇りを持ちながら、再び隆盛を願って今生きているわれわれにバトンタッチした、先人の思いであるかのようだ。



重要伝統的建造物群保存地区に選定された横手市増田町増田にある内蔵。豪雪に備え、家の内部に蔵がある。